

# ARCS動機づけモデルを活用した高等学校地理歴史科における学習意欲の向上を図る授業づくり

学籍番号：199305

氏名：上嶋一志

主指導教員：水野恵司

## 1. はじめに

### 1.1 背景・目的

今日、学習意欲の低下がPISAやTIMSSなどの国際的な調査や、平成31年度の全国学力・学習状況調査などで確認されており、学習意欲の向上が現在の主な教育的課題の1つとなっている。しかし、私の実習校での生徒の様子を観察すると、「授業めんどいな」「勉強するのだからいな」といった声が度々聞こえ、学習に対する否定的な考えを持つ生徒が多いと感じた。このような生徒に対する授業実践として、学びに向かう意欲のモデルであるARCSモデルに注目した。本研究は、ARCSモデルに着目し、授業観察や実践などを通じて、学校組織がARCSモデルを活用した授業をどのように展開しているのか観察する。また、著者による授業実践を通じ、単元の中に計画的に盛り込むことによって生徒の学習意欲の効果を検証することを目的とする。

### 1.2 ARCSモデルについて

授業でのやる気、動機づけを高めるために活用できるものとして、Keller(1979)のARCSモデルがある(J.M.ケラー, 2010)。ARCSモデルとは、学習意欲に関連する概念を4つに分類したものであり、①注意(Attention)、②関連性(Relevance)、③自信(Confidence)、④満足感(Satisfaction)の四つの側面(その頭文字をとってARCSモデルと命名)に分類される。これらの側面のそれぞれにおいて意欲を刺激・保持するための方略を作り出すことを可能にするとしてJ.M.ケラーは明らかにした。

## 2. 基本学校実習での取り組み

基本学校実習Iにおける目的は、大阪市立A高等学校(以下実習校)の取り組みや生徒の様子について把握することを掲げて取り組んだ。その結果、実習校は、総合学科を設立し、高い志を持って進路を切り拓くキャリア教育を中心に添えたカリキュラムのもと、進路保障のための組織的な補習体制を構築し、進学実績へと繋げるとともに、個に応じたきめ細かい指導・支援を充実させることのできる教育を実践していることを把握した。また、生徒の様子に関しては、生徒の学習への向かう姿勢について、「授業めんどくさいな」などといった否定的な声は広く事ができた。

基本学校実習IIにおける目的は、ARCS動機づけモデルの「関連性」に着目し、授業を設計・実践し、その授業での生徒の発言や振り返りのアンケートへの記入をもとに、より生徒の学習

意欲を高められる授業に改善することとした。授業は政経(内容はアジアの近現代史)を担当し、実習校の政経選択者(3年生:22名)を対象に授業を行った。具体的な内容としては、授業の目標に、①日本の近隣諸国(中国・韓国・北朝鮮・東南アジア)の大戦・冷戦後の経済成長を遂げる過程について理解させること、②香港のデモについて、香港の歴史や制度の仕組みなどを調べ学習として行い、今現在香港が置かれている現状について把握させること、の2点を掲げ、その中で、ARCSモデルの「関連性」の支援方略を適宜埋め込み、授業を実践した。その結果、「関連性」の下位尺度である目的指向性や動機との一致、さらに親しみやすさの3つの尺度に関する感想が見受けられた。

### 3. 発展学校実習での取り組み

発展学校実習における目的は、高等学校地理歴史科の授業実践において、ARCSモデルを活用した授業を単元の中に計画的に盛り込むことによって、生徒の学習意欲がどのように変化していくのかについて、その効果を検証することを目的とした。

#### 3.1 発展学校実習Ⅰでの取り組み

発展学校実習Ⅰでは、主に授業担当学級(地理A・世界史演習)の観察を通じ、生徒の特徴を把握することに主眼を置き、実習を進めた。実習校での取り組みについて、コロナ禍ということもあり、昨年度の基本学校実習で想定していた予定を変更せざるをえず、計画づくりの段階から再考することとなった。授業観察の結果、地理Aの授業の生徒に関しては、観光を中心に学ぶ系列の生徒ということもあり、地理に興味を持っている生徒が多いように感じた。また、世界史演習の生徒に関しては、世界史を暗記科目ととらえている生徒が多いことを把握した。

#### 3.2 発展学校実習Ⅱでの取り組み

発展学校実習Ⅱでは、地理Aと世界史演習の授業実践において、ARCSモデルを活用した授業を単元の中に計画的に盛り込むことによって、生徒の学習意欲がどのように変化していくのかについて、その効果を検証することを目的とした。地理Aは日本地誌について、世界史演習は第一次世界大戦以降から第二次世界大戦終結まで、約1カ月半の間担当した。その中でARCSモデルの支援方略を活用し、単元計画に組み込みながら授業実践を行った。両方の授業共に中野(2015)の作成した尺度を用いて授業期間の事前・事後に質問紙調査を行った結果、4つの側面のすべてで平均値が上昇していることが明らかとなった。

## 4. 成果と課題

今回の研究では、ARCSモデルに特化して授業を展開したが、実際に現場に立ち授業をしてみると、生徒の環境や態度が授業日によって異なり、生徒たちの反応を見ながら適宜修正を加えたりしながら授業をおこなわなければならない、予定通りに計画が進まない場面が多く感じた。また、コロナ禍の影響で授業の中での取り組みが制限されるなど、教育環境もかんがみて授業を行う必要が開くことも感じた。そのため今後は、生徒との関わりや社会の環境など、授業外の様子も含めてARCSモデルを適応することができないか、日々の活動からARCSモデルを活用し続け、生徒の学習意欲を高めることを探究していく。